

『するが有度山麓9条の会』NEWS

劫火の中になお生命ありて④

明泉寺14世住職 故水谷光子

二日ほどして、隣家の焼け跡から、母と弟の焼死体が見付かった。二人の生存を期待していた私は、変わり果てた母と弟の姿に、心身の力が一時にすっかり抜けていくのを感じた。隣家のご主人も、少し離れた所で、亡くなられていた。弟を水風呂に入れて、母は弟を庇う形で亡くなっていた。風呂桶は焼き尽くされ、残されたのが、弟の体を巻いていた。水に浸っていたから、弟の体は余り焼けず、入学したばかりの静中(現・静岡高校)の帽子の徽章が、傍らに残されていた。母は實に無惨な焼死体だった。和服式のモンペを着ていたが、重ね合わせた襟元が僅かに残り、その柄で辛うじて母と判別できたのであった。



坪庭の一隅に、祖父・母・弟の遺体を安置し、町内の防衛団の方々のお力添えで、茶毘に付したのは、四日後の

夕刻だった。あちこちから寄せ集めた、焼け残りの柱などの木片を使つての火葬である。駆け付けてくださった総代の小島さんに付き添われ、私は喪主として点火し、ひたすら正信偈を誦した。この時、私が暗記していたお経は、他になかったし、火葬や葬式にどのお経をあげるかなども、全く知らなかったのである。三人の家族と今生での袂別である。精一ばい、お経をあげようと思いつつも、声は涙に途切れ胸はうつろ、半ば虚脱状態だったようである。劫火の中での正信偈と違つて、あのときの落ち着きはなく、乱れに乱れたお勤めしかできなかった。どこかで生きている筈の父の身も案じられるし、重度の火傷で身動きの儘ならぬ妹には、未だ話しそびれているし…。遺体は六月のこと、四日も経っているから、鼻を突く異臭だった筈だが、そんな記憶は全くない。焼け跡の強烈な臭いに消されたのだろう。めらめらと上がる炎は、あの空襲の日の炎と違つて、限りなく清浄な炎に思われた。多感な青春の感傷であったのか…。私はひたすら念仏しつつ、その炎に見入っていた。そのうちに、ふとこの浄らかな火に飛び込み、母と一緒に、彼の国へ旅立ちたい衝動に駆られた。勿論それはほんの一瞬のことで、すぐ我に返った。重傷の妹と、どこかで生きている筈の父への責任である。あの劫火の直中であつて、なおも生かされた生命である。『生かされたからにはそれだけの使命がある』と気付いたのは、茶毘の中に母の声を聞いたような気がする。

兵隊さんの担架に委ねた父の行方は、その後八方に手を尽くしたが、杳

青田恵子 詩・布絵展

会場 池田公民館(静岡市駿河区)

日時 12月24日(土)
12:00~19:00
25日(日)
10:00~19:00
26日(月)
10:00~17:00



青田恵子さんは、2011年東日本大震災の原発事故により福島県南相馬市から滋賀県大津市に避難されている方です。なつかしい故郷の思い出、故郷へ帰りたくも帰れない理不尽さへの嘆き、怒り、そんな思いを布の切れ端で絵として表現されています。皆さんで、青田さんの心に寄り添えればと思います。この「布絵展」を企画いたしました。全60点の展示・DVDの上映を行います。

主催：青田恵子「詩・布絵展」開催実行委員会
協賛：静岡みらい福祉協会・たんぽぽ保育園・つくしんぼ保育園
後援：静岡市平和委員会・新日本婦人の会静岡支部
(※協賛団体を募集中：団体名は展示会場に掲出！)
問合せ先：滝下正敏(携帯：09011096607)
(E-mail: takshita420@gmail.com)



青田恵子 詩・布絵展開かれる

昨年暮れに青田恵子さんの詩・布絵展が池田公民館で開かれました。大人150人、子供40人の参加者があり、たくさんの方の感想を頂きました。3・11を忘れないことの大切さを共感することができました。

(恵子さんプロフィール) 福島県南相馬市(旧相馬郡小高町)に誕生。ごく普通の専業主婦ではあるが、和裁・洋裁が好きで自分の洋服はほとんど自分で作る。3月11日の超大型地震・津波・原発事故で宮城へ二ヶ月避難する。その後、大津市に避難し現在に至る。布絵は震災2、3年前から年賀状などに古着や落ち屑で作りはじめていたが、震災後、避難先での不眠、過食の苦しみから逃れようと、一層制作に没頭するようになる。

(次号で作品と感想文を紹介します)